

中央林間病院 理事長に聞いた 「ちょっと気になるおなかの話」 パート2

おなかまわりの痛みの原因、解説します

参加無料 「医療セミナー」開催 主催：ベネッセスタイルケア



講師：木山 智氏
中央林間病院 理事長・院長 / 医学博士

おなかの痛みには様々な種類がある。「気のせいかな」と感じる軽い痛み、胃のもたれや、長く続くげっぷなどの症状は、実は大きな病気が原因の可能性も。ベネッセスタイルケアでは3月7日(土)に医療セミナーを開催する。会場は「グランダ鶴間・大和」(参加費無料・先着20人)。

講師を務めるのは地域に寄り添った医療を提供している「中央林間病院」の院長・木山智氏。前回のセミナーでは内視鏡で発見できる腫瘍や潰瘍など消化器疾患の基本知識などを解説し、好評を得た。今回は「ちょっと気になるおなかの話・パート2」として、身近なおなかまわりの病気について、手術の画像も交えて解説してくれる。

「気のせい」の痛みはない
おなかだけでなく日常生活まで不快にさせる「胃(上腹部)の痛みやもたれ」胃潰瘍やがんなどの可能性もあるため内視鏡検査で胃の状態を確かめても何の異常もなく、「気のせいかな」と放置してしまうケースがみられる。木山院長は「この中には『機能性胃腸症』という胃の運動障害などが原因のケースが多くあります。食べ物を運ぶために、胃は蠕動するのですが、うまくバランスが取れず一部だけ収縮する状態になると、いわゆる胃けいれんの状態になって痛んだり、逆に収縮機能が低下して、胃もたれ、げっぷ、胃が重い感じがずっと続くことがあります」と話す。しかし胃カメラで炎症や潰瘍などが現れないため、見逃されてしまうケースもあるという。「はつきりとした原因は確立されていませんが、神経的な要因もあります。腸の場合は『過敏性腸症候群』という病気がそれにあたります。緊張やちよつとしたストレスでおなか痛くなったり、トイレに行きたくなったりします」と木山院長。

機能性胃腸症も過敏性腸症候群も適切に診断されれば治療薬が処方され、驚くほど楽になるケースもあるという。「痛みに気のせいはあるかもしれませんが、受診を呼びかける。軽視できない「鼠径ヘルニア」脱腸」
足の付け根あたりが出っ張る「鼠径ヘルニア」、いわゆる「脱腸」は筋肉が緩むことで生じるため、筋力が落ちてくる50代以降の男性に多い。木山院長は「腸の出っ張り以外に自覚症状はないため、放置されがちですが、突出している時に出口が締められて痛みが生じる『嵌頓(かんとん)』になる危険です」と説明。腸が戻らなくなり腐ってしまうため、緊急の手術が必要になるという。「患者さん自身には状態がわからないので、早めに受診して危険なサインが何なのかを知っておいた方がいいですね」と

先着 20名様

3/7(土)

「ちょっと気になるおなかの話 パート2」

～おなかまわりの痛みの原因、解説します～

14:00～15:00

講師 木山 智氏(医療法人社団 三栄会 中央林間病院 理事長・院長)

会場 グランダ鶴間・大和 (大和市内下鶴間2-3-41)

◎小田急江ノ島線「鶴間駅」より徒歩12分(約960m)

解説。また「鼠径ヘルニアは誰もがなりえる病気です」と話す。身体を鍛えている人や筋肉の厚みのある人の方が罹りにくいといえるが、予防できるものではない。しかし治療は進歩している。「鼠径ヘルニアは手術しないと治りませんが、今では治療の進歩により、身体への負担が少なく手術ができるようになりました。傷も小さく、突っ張り感もなくなるなど、術後も楽になっています。また再発もほとんどなくなりました」と木山院長は説明する。

セミナーでは、実際の治療や手術の動画や写真を見ながら分かりやすく解説してくれる。併せて胆石や急性虫垂炎(盲腸)の手術の話なども行う。また同院の診療技術部長で放射線科技術師長の鈴木冠史氏が、内臓脂肪の計測や放射線を使った最新技術「肝動脈化学塞栓療法(TACE)」について紹介してくれる。



木山 智 院長
社会医療法人三栄会
中央林間病院 院長 / 医学博士
消化器外科学会専門医・指導医

本当に怖い胃がんについて 男性の罹患率1位、死亡率2位

大和市で地域に寄り添った医療を提供している中央林間病院(中央林間4の14の18、社会医療法人三栄会)では、日本人の死因の大部分を占める「がん」の治療に尽力しており、市民ががん検診の重要性を訴えている。消化器外科の木山智院長に胃がんについて話を聞いた。

胃がんの原因の場合もピロリ菌が原因の場合も胃がんのリスク要因としては、喫煙、多量な飲酒や塩分摂取が言われており、現代の日本人は誰でもなりえるということ。

また別の要因としてヘリコバクターピロリ菌がある。ピロリ菌は井戸水、川の水から感染するとされ、50代で70～80%の人が感染している。

「最近食欲がない」「立ちくらみ」「貧血」「体重が減っている」「うんちが時々黒い」などの症状は受診が必要な危険信号。進行胃がんが見つかることもある。

「まずは症状がないうちの早期発見が大切です。大和市がん検診の胃がん検査では『内視鏡検査』と『X線検査(バリウム)』を実施しており、選ぶことができます。定期的な検診が重要です」と木山院長は話す。

実は胃がんかも
食べ物が食べられなくなる、貧血などの何気ない症状が、実は胃がんが原因だったという恐ろしい結果を生むことがある。

現在、胃がんは男性の罹患率が1位、死亡率は2位である。中央林間病院の消化器外科でも胃がんの患者さんは多い。

「まず別の要因としてヘリコバクターピロリ菌がある。ピロリ菌は井戸水、川の水から感染するとされ、50代で70～80%の人が感染している。」